

テーマⅢ 現在の政治と社会から

ドイツ——タブーを破る力

広島修道大学 森 島 吉 美

(以下の文章は、一九九七年から二〇〇〇年にかけて

毎年訪れたドイツにおいて、自らの五感で体験した西洋見聞録のようなものである。コール保守政権からシュレーダー革新政権への政権交代時期であり、ユーロ体制への移行時期でもあり、旧東欧が西側へ統合されていく過渡期でもあったことから、「動きのあるヨーロッパ」の中の「静なるヨーロッパ」のようなものが見えてきたらと思う。新しい動きを起こす力とは何か、その力の源はどこにあるのか、何が変わりし、何が変わらないのか、そんなことを探るドイツ滞在であった)

一、一九九七年～一九九八年、ハノーバーにて

(『部落解放ひろしま』第三五号部落解放同盟

広島県連の原稿から)

コール首相の最後か？

ドイツでは毎日、「ユーロ(ヨーロッパ共通通貨システム)がやってくる」とマスコミが騒いでいる。

四月二三日、国会でその導入をめぐって最後の話し合いをしていた。テレビでその歴史的瞬間に立ち合えたのは幸運であった。PDS(民主社会党)という旧東ドイツで生まれた党(旧東ドイツ時代のSED・ドイツ社会統一党の後継政党)を除いてすべての党がこの歴史的決定に賛成の方向で弁を張っている。ただ国民の不安をいかに解消するかが大きなテーマである。戦後五〇年かけてマルクを安定させ、そのマルクで将来を設計してきた

国民がそう簡単にマルクが消えて行くことに賛成できるわけがない。この国民の不安に対して、コール首相は、ユーロ導入を経済的側面からだけでなく、かつての英国首相サッチャーの、「我々はドイツを二度まで倒した。

しかし又もやドイツが出てきた」という発言を過去のものにできるチャンスだと訴える（*Neue Presse* 発行部数がドイツで一番多い日刊新聞一九九八年四月二四日）。

プラン通りに行けば、一九九九年一月一日から実施されることになる。つまりここドイツでいうと、先程述べたようにマルクという通貨がなくなるといことになる（正確に言えば、国民の手からマルクが具体的になくなるのは二〇〇二年から）。別の見方をすれば、ヨーロッパと同じ通貨（ユーロ）で旅行、買い物ができるということになる。ヨーロッパの中では、すでに、ほとんどの国境でパスポートのチェックはなくなっている。そこにユーロが導入されれば、ヨーロッパは一つの大きな経済大国になる。それも来年から。

先程述べたように、かなりの国民がユーロ導入に消極的である。四月二二日、ドイツのテレビ局ZDFの意識調査によれば六〇%以上の国民が消極的であるという。経済的に安定を誇るドイツ、まだまだ不安を抱える他の

ヨーロッパ諸国、それが一つになる、不安も無理もない。今の最大野党SPD（社民党）は今年の九月の総選挙で政権を取り戻し、この国民の不安を解消しようと懸命である。

ここハノーバーでは二〇〇〇年にEXPO（世界万国博覧会）が開催される。市役所が修復中、中央駅も改築開始、EXPO会場付近は大工事の最中である。おまけに今年の九月には総選挙が待ち構えている。その前哨戦ともいえる、各州での州議会選挙がすでに始まっている。いずれの州においてもSPDが圧勝している。シュレーダーという人物を、CDU（キリスト教民主同盟）の現首相コールの対抗馬にかついで、国民の支持を確実に集めている。おそらく、いや確実に政権交代が見られる。もしそれが実現されれば、一六年間のコール政権は終止符を打たれることになる。失業率が一五%にならんとしている現実、旧東ドイツの復興がままならない現実、老人年金問題という大問題が国民の不安をあおいでいる。（失業率が一五%といっても、彼等を支える社会保障はしっかりしている。そのために、消費税がこの三月から一五%から一六%になっても、今は耐える時と国民は納得している。だからこそ失業問題が国民全体の問題として受け取られることになる。テレビ番組では、視聴者が

直接参加する討論番組が多くある。その中で多くの人がいとも簡単に、「今失業中です」と自己紹介している。失業者を一人の人格ある存在として認める社会がここにはある。」

SPDと、経済成長率が華やかな時に生まれた「緑の党」との連合政権が既成事実のようにマスコミが騒いでいる。「緑の党」にして見れば、結党以来初めて政権に加われるチャンスである(州議会においてはすでにそれが実現しているところもある)。ところが、この「緑の党」が今年になって、各地の州議会選挙において惨敗を続けている。それもそのはず、ガソリン代を今の一マルク五〇〜八〇を三年後には五マルクにする、飛行機を使った休暇旅行は三年に一度でいい、と選挙公約に入れたからである(これは、彼等が環境を護ることが二世紀にかけてどうしても避けて通れない重大事であると、環境を護ることを視点に置いた環境税、ECO(エコロジー)税を税の構造的見直しの中心に置いているからである)。この不況の最中国民から相手にされなくなるのもよくわかる。特に旧東ドイツの反発がひどい。

彼等の政策が間違っているとはだれもいわない(ぼくも中味は賛成である)。しかし、国民の答えは、理屈抜きにノーと出た。ひどい州においては、彼等は二〇%以

上の票を失っている。SPDは彼等との連合も考え直さざるを得ない立場にたっている。(彼等との連合を選挙プログラムにのせると国民の反発のあおりを食うからである。)

ここにカリスマ性をおびたシュレーダーの登場である。SPDは、いっきに過半数をとる闘いに挑んでいる。シュレーダーは、ハノーバーを州都にもつニーダーザクセン州首相である。ぼくの住まいは、そのハノーバーのど真ん中、リスターマイレというところにある。一歩外に出ると歩行者天国の大通りである。州議会選挙の折には、各政党のデモンストレーションの舞台になった。

ネオナチの動き

昨年(一九九七年)の一二月ヨーロッパ共同体・EUの首脳会議でトルコのヨーロッパ共同体への加盟がまたも拒否された。トルコのイルマツ首相は、「ヨーロッパをキリスト教徒のクラブにして、それ以外の国はヨーロッパ共同体に入れないつもりか」とドイツ首相コールを名指して非難した。

もちろん、ドイツ政府は、トルコの批判は的外れと反論している。「トルコがEUに加盟できないのは、宗教のせいではなく、政治的、経済的な理由だ。EUは議会

制民主主義などの共通の価値観をもった国の集まりであり、国内の少数民族を武力で弾圧する国を受け入れることは難しい」と弁明している（News Digest International発行『ドイツニュースダイジェスト』一九九三年九月号）。

ドイツ国内には、第二次世界大戦後から多くのトルコ人が住んでいる。そこへ、トルコ政府に追放されたクルド人が入ってくる。トルコ人は、今やドイツ人口の二・五%を占め、トルコ人就労者による昨年の生産額は、ドイツ国内総生産の二%に達した。しかし、失業率も高く、トルコ人の四人に一人は失業中である。

（“Aktuell ’98” Harenberg Lexikon Verlag 発行 Dortmund 一九九七年参照）。

今年の四月二〇日の新聞に、コソボ（旧ユーゴスラビアの少数民族であり、現在セルビア政府から徹底的迫害を受け、多くのコソボのアルバニア人がドイツに逃げてきている）のアルバニア人が、ドイツ人の女性に対する婦女暴行罪で裁かれた記事が出ていた（“Neue Presse” 九〇号 一九九八年）。

ドイツにとって、旧東欧、アラブ諸国の内戦、民族対立は、今、この話である。こんな中に、外国人排斥を訴える極右、ネオナチが勢力をのばす土台がある。特に

大量の失業者を抱える旧東ドイツで（旧西ドイツのほぼ二倍の失業率）その伸び率が目だって高い。一九九六年には、極右総体で四五三〇〇人を数え、そのうち暴力行為に及ぶ者は六四〇〇人、ネオナチの数は二四二〇人を数える。

極右の党は法的に禁止されている。暴力行為に及ぶものの三分の二は二一歳以下の若者である。極右の党は法的に禁止されているといっても、共和党（レプブリカーナー）、あるいはドイツ民族同盟という彼等の仮の姿がある（当然政府の監視の元にあることは自明であるが）。各々の党が一五〇〇〇人程度の党員を抱えている。

（“Aktuell ’98” 参照）その共和党の党首がいるこのハーノーバーでは、先の州議会選挙において、三・五%の支持を共和党が集めた。彼等の当面の政策は、ヨーロッパ経済共同体をつぶすことにある。だから、当然にして今のユーロ導入への動きに積極的に反対している。

四月二六日、ザクセン・アンハルト州（旧東ドイツの中でも一番の失業率をかかえる州）において、州議会選挙があった。SPD（社会民主党）が最大の票を集めた（期待されたほどの伸び率ではなかったが）。CDU（キリスト教民主同盟）は二〇%以上の票を失い、極右の党が初めての闘いにおいて一三%近い票をとり、緑の党は

5%をとれず議席を失った。極右の党・D.V.U.（ドイツ民族同盟）はいっきに九九ある議席の内一五の議席を占めた。そして、P.D.S.という左翼の党が二〇近い議席を維持している。

マスコミの騒ぎは大きい。「ドイツ人の失業者を救う一番の方法は外国人労働者をドイツから追い出すことだ」とD.V.U.は、全ての家庭に党宣伝冊子を郵送した。彼等はその他の一切の選挙活動をしていない。ほとんどの票が二四歳までの若者であったという。それも、東西ドイツ統一後二回目の選挙において初めて選挙に参加した若者であるという。テレビには、それぞれの党の代表が選挙結果についてディスカッションしているが、極右の党はだれも参加していない。

この結果を受けて、彼等極右の党の選挙事務所の回りでは、「ナチは出ていけ」と声を張り上げるデモ行進があったが、その光景が寂しそうに見えたのは多くの錯覚だったろうか。

昨年の八月一六日から一七日にかけて、ドイツ国内でヒットラー側近の一人であった（当時副総統）ルドルフ・ヘスの追悼一〇周年にあわせて各地でネオナチのデモンストレーションが行われた。ヘッセン・チューリンゲン州で一五〇人が、バーデン・ヴュルテンベルグ州では

二九人のネオナチが、逮捕されている。彼等の動きに抗議する左翼グループのデモも同時に起こっている。ザクセンアンハルト州（旧東ドイツ）では、P.D.S.の州書記長が逮捕されている。同じ日に、ドイツのネオナチが参加したデンマークのデモも報告されている（*Die Welt*、一九九七年八月一七日）。（ちなみにヘスは、一九四六年のニュールンベルグ裁判において無期懲役の刑を受け、その後一九八七年八月一七日拘留中に自殺を遂げた。）

昨年（一九九七年）、かつて極右活動で逮捕されたことのあるマンフレッド・レーダーがドイツ連邦国防軍に所属し、こともあろうに、ハンブルグ士官学校で講演をしていたという事件が明るみに出た。彼に託された講演の中心は、よりによって、一九四五年までドイツ領（当時ケーニヒスベルクと呼ばれていた）であり、現在ロシアのバルト海に望む港湾都市カーニングラード（たくさんのドイツ人が住んでいる）への支援のありかたを求めてというものであった。ハンブルグ士官学校は五〇の国の士官が集まるインターナショナルな士官学校である。特に旧東欧の新しい民主主義国家の士官が集まっていた（*“Spiegel Online”* 10/1998）。国防大臣、外務大臣が厳しい政府の取り調べに応じたことは言うまでもない。

ドイツでは現在十カ月の兵役の義務がある。その軍の中では、二日に一回は極右の事件があると報告されている（"Spiegel Online" 10/1998）。例えば、四月一七日の新聞（"Neue Presse"）によれば、ボスニアに滞在するドイツ平和維持軍の二人が、一緒に活動に従事するアルバニア人に向かって、「おまえたちは糞つたれのユダヤ人だ、外国人の豚野郎だ。わかるか、ここにヒットラーがいたらお前らもガス室送りだ。そうすればお前らはあっさりこの世から消えてなくなるだろうに」と酒に酔ったあげく、罵声を浴びせたという。もちろん彼等は、懲戒処分を受け、罰金五〇〇〇マルクを支払った。こういった極右の活動に対して反対運動もないわけではない。（一般には、彼等の行為は「明確に犯罪」という意識があるため、それ以上に問題にもされていないのが現状である。時折、テレビの討論番組に登場するネオナチと称する若者が回りからこっぴどくやつつけられている光景を目にする程度である。）

四月一六日の"Neue Presse"は、一九九一年一月二六日、マッケンロードという町の近くにあったネオナチのスクーリングセンターを襲撃したネオナチ反対グループの内、現行犯で逮捕された五人に対する裁判がようやく今年になって（四月一五日）なされたという記事

を伝えている。ゲッティンゲンの州裁判所の前には、被告の無罪判決、「悪いのはネオナチだ」と訴える支援者が一二〇人集まったという。あるいは、その翌日の記事には、北ドイツのネオナチのスクーリングセンター（ツェレという美しい町に隣接するジュウトハイデという町にある）が国によって閉鎖され、財産が没収されたという。そこには、毎年夏に二〇〇人の若者の参加者を数えていたという。

強制収容所の跡

ネオナチの行為の対極にあるのが強制収容所の跡である。昨年の秋、ミュンヘン郊外に位置するグッハウ強制収容所の跡を訪ねた。殺されたユダヤ人の死体の写真ははっきりと一人一人の顔を写し出している。なかには子どもの顔まである。夢中でその写真を見入っていたのが、ふと顔をあげると、僕のとなりに一人のドイツ人の青年がいた。彼に気付いた僕に対して、彼は、あわす顔がないような、申し訳なさそうな顔でうろたえていた。どんな顔をして、どんな風に、外国人であるだけに、何を語りかけたらいいのか。何も語りかけられるはずがないことがわかるばくは、自分の方から遠ざかって行ってやった。

ドイツの多くの若者は各地の強制収容所を訪問する。政府は、全国どこの町の若者も簡単に足を運べる場所に、先の戦争犠牲者（ユダヤ人）の慰霊碑をつくっている。なかでも強制収容所の跡はその代表的なものである。ここハノーバーにも戦争犠牲者のモニユメントがある。素晴らしいオペラハウスの隣に位置する。その慰霊碑には、戦争当時強制収容所に送られたハノーバー在住の全てのユダヤ人の名前、生年月日、どこの強制収容所にいつ送られたか、どのように殺されたかがしっかりと具体的に石に刻まれている。ハノーバーのドイツ人の戦争体験者にして見れば、どのだけか、すぐにわかる。もっといえば、いかにして彼等が強制収容所に送られたか具体的に見てきた人もいる。なかには、強制収容所送りに具体的に手をかけた人もいる。

新しいドイツの首都ベルリンは今建設ラッシュである。「ベルリンの壁」は博物館でしか見られない。かつて学生ころに何度も訪れた時の緊張感は、今のベルリンにはもう存在しない。旧東ドイツ時代の建物がこわされ、全く新しい姿に改築されるか、全てが新しく建て直されている。新しい国会も建設中である。その中で、ホロコースト記念碑建設をめぐる今、さかんに議論がたたかわされている。この記念碑は、政府とベルリン市、民間

基金が共同で建設を計画してきた。世界中の芸術家に呼びかけ、作品を応募し、いいものを選ぶというものであった。選考のありかたをめぐるオープン形式の討論会が何度ももたれてきた。テレビでそれが放映されたことがある。討論会場には、強制収容所で両親が殺されたユダヤ人も来ていた。彼は、「芸術家が何がわかるか?」と質問を投げかけた。その質問を受けた建設委員会の責任者は、「それでいい。あなたの言葉でいえば、何もわからない芸術家が今の視点でできることをやる。それがホロコーストを二一世紀に伝えることになる」と必死に説得していた。アメリカの建築家アイゼマン氏と彫刻家セラ氏の共同作品が選ばれることになりそうであるが、結局は、作品の見直しを余儀なくされ、最初の計画になかった、作品にユダヤ人の犠牲者の名前を刻むことに両氏は同意したという。

この建設をめぐるいろいろなことがつきまとう。記念碑予定地の工事中に、ヒットラーの元で宣伝相を勤めていたゲッペルの防空壕が発見された。今のところ記念碑建設は中止されている（「Neue Presse」一九九八年一月二八日）。六〇年代後半までは、このテーマはタブーとされてきた。しかし今や学校でも堂々と語られている。テレビでもホロコーストに関する番組を探すの

には苦勞しない。そしてとうとう、『緑の党』は今年の二月三日、ナチ政権下で定められた法律にもとづく不当判決を全て無効とする新法の草案を連邦議会に提出した。法案は、ナチスの全権掌握を定めた「全権委任法」、精神病者や心身障害者の組織的殺害を可能にした「優性学法」など六〇あまりの「ナチス法」を成立時点でさかのぼって無効とするものである。ユダヤ人はもちろんのこと、それ以外のナチの犠牲者も議論の表舞台に登場してきた。

先に紹介したニーダーザクセン州首相シュレーダーは、州議会選挙においてSPDが圧勝し、SPDから、今年の九月の総選挙において、かれを連邦首相候補として闘うことが正式に認められるや、すぐにイスラエルに飛んでいる。日本の新首相が、何は置いてもアメリカにすっ飛んで行くのとは意味が違う。

まとめ

四月二三日の国会において、とうとう、ユーロ導入が五七五対三五で可決された。この同じ日に、アウシュヴィッツでは、強制収容所跡からクラカウのガス室跡まで七〇〇〇人の（ナチに殺害された六〇〇万人のユダヤ人に対する）追悼行進が、イスラエルでは、一〇〇〇人

の強制収容所生存者とともに、世界中から集まってきたユダヤ人の若者の追悼行進が行われた（*‘Neue Presse’* 一九九八年四月二四日）。先の強制収容所の跡を見学していたドイツ人の若者が、そこを訪れる外国人に対して、顔をうつむけ、恥ずかしそうに、苦しそうにしている姿を、ヨーロッパの他の諸国のはよく知っている。だからこそ、ユーロ導入をドイツがリードしてきたことにヨーロッパの他の諸国は何の不安も感じなかった（不安を感じるところか、ユーロに参加できるか、ドイツの評価を待ち望んでいる国もあった位である）。

広島は国際平和都市といわれている。世界に対する平和の象徴として原爆ドームが、原爆資料館がある。しかしそこを訪れる日本の若者が他の外国人に対して、先の戦争に対する日本の行為を前に、ドイツの若者と同じように「恥ずかしがり、語りかけたくても語る言葉を失う」という体験をどこまでするだろうか。

二、一九九九年、カッセルにて

（『修大論集』第四一巻第一号、広島修道大学人文学会の論文の一部）

おとこの歴史の後始末をするおんなたち

昨年（一九九九年）の九月、ドイツのカッセルで、青少年問題に具体的関わりのある青少年指導者が世界中から集まるセミナーがあった。筆者もその研修に参加した。NATOのコソボ介入直後のことであつたことから、セルビア近辺の諸外国の指導者との会話が興味をひいた。チェコから来た一人の女性は、つたないドイツ語で、それでも必死に、アラビア諸国の参加者の「NATO介入」への批判的発言に、反論する。「わたしは、この一〇年来、コソボから逃げてきた子どもの世話をしてきた。彼らは親を失っただけでなく、学校にも行けず、大人から習ったのは、セルビア人を殺すことだけ。セルビア人の子どももこれとほとんど同じ。誰かが、早く、この状態を打開しなくては、元の状態に戻るには、この何倍も時間がかかる。NATOが武力介入するのはよくない、とは誰でもいえる。でも子どものことを考えたら・・・。わたしはじっと耐えて、子どもを抱きしめていた（後は涙で言葉が続かない）」。

ある日のパーティーの後、夜遅く電停でセミナー参加者の一人であるルーマニア人の女性と話す機会があつた。彼女は国に四歳の女の子を置いてここカッセルに来ていゝる。「ルーマニアは近くていいね。日本は遠くにあつてここにくるまで大変でした」と筆者。「わたしはバスで

ここまで三二時間かけてきた」と彼女。「何で又バスで」と筆者の愚問。「だって飛行機はお金がかかるもの」と彼女。「我々の国は、チャフセスク政権に破壊されてしまいました。彼らは政治的体制を破壊しただけではないの。自然なる大地そのものを、ものをつくることもできないほど破壊したの（環境汚染）。国の将来を担う子どもの頭をぶちこわしたの（教育問題）。ゆっくり時間をかけて、〈節約〉して国の建て直しをしていくの」と笑いながら彼女。

フランクフルトへの遠足のバスの中で、スロバキアから来た女性と席を隣り合わせる。

「わたしの国には原発がいくつもあるのよ。チェルノブイリの事故のときは驚いたは。吉美、あなたは世界最初の被爆の町広島からといつたわね。一度いつてみたいな」と彼女。「あなたは子どもがいるの」と筆者。「ええ、娘が一人。ピアノリサイトルでいまドイツに来てゐるの」と彼女。「それじゃ、この研修中に会えるね」と筆者の愚問。「でも、彼女がいる街まで行くのにお金がかかるから無理よ」とそっけない返事の彼女。それでも、彼女の子どもの話はフランクフルト到着まで二時間とどまることはなかつた。

それぞれの国がそれぞれの歴史を抱えて、今旧東欧の

民族が西側の世界の仲間入りをせんとしている。その中で、ドイツから一番遠い国の日本がドイツに一番近く感じ、地理的に近いはずの彼女たちにはドイツが遠い（だってバスで三二時間だもの！）。NATO、チャフセスク、原発という父権制の象徴的存在の前に、自分の子どもの将来に全身を捧げるおんなたち。

昨年、九月の一ヶ月間滞在させてもらったカッセルのホームステイ先の主人の話。彼はユダヤ系ドイツ人。ヒットラー時代にはまだ五歳にもなっていなかった。彼の親戚の多くは強制収容所のガス室に送られている。中にはアメリカその他の国に逃げたものもいる。「わたしは、だから世界中に親戚があるんだ」と胸を張る彼。「吉美、わたしが今回日本人であるあなたをホームステイの客として選んだのには訳があるんです。わたしは今、二度目の連れ合いとここで生活しています。最初の妻は、そう、四分の三の日本人でした（笑い）。一九一〇年代にドイツ企業が日本政府の招聘で日本に技術指導でいていました。その中のドイツ人の一人がある日本人の女性と恋愛をし、子どもまでもうけました。時代が時代ですから、当然、彼女の家族が猛反対し、彼女は勘当されたそうです。彼との三人暮らしが始まりました。ところがそのドイツ人が、ある日、国内事情で、ドイツに帰ら

ざるをえなくなりました。その女性と子どもの二人は日本に置き去りでした。彼女は自分の親の元には帰られず、毎日が家もない、その日暮らしであったそうです。一九二二年の大震災にあって、彼女は一人の子どもを残して死にました。その幼い女の子は母親の実家に引き取られたそうですが、間もなくして、一人でシベリア鉄道を使ってドイツに父親を捜しにきました。彼女の実家も、ドイツ人との間に生まれた彼女を家においとくわけにいかなかったからです。彼女はハイデルベルクにやってきました。当時は第二次世界大戦中でありました。幸い、当時日本とドイツの関係が悪くなく滞在は難しくありませんでした。戦後、連合軍がドイツに上陸してきました。ハイデルベルクにやって来たのはハワイからのアメリカ軍でした。その中に日系のアメリカ軍人がいました。彼は日本人でしたが、戦後自分の存在を保障するためにもアメリカ軍に入らざるをえなかったのです。彼はハイデルベルクで彼女に出会います。すぐに、彼女と一緒に生活を始めます。女の子が一人生まれます。ニュルンベルグ裁判が終わわり、間もなくして彼はハワイに帰らざるをえなくなりました。ところが日本人である彼女を自国に残して帰るわけにはいきません。結局二人をドイツに残して彼は一人で帰ってしまいました。二人の間に生まれた

その彼女がわたしの最初の妻です。四分の三の日本人の血が入った女性です。わたしが彼女と結婚してから、彼女の父親探しを始めました。わたしの叔父ヒルデスハイマー (Wolfgang Hildesheimer) 作家、一九一六年生まれ、一九三三年パレスチナへ亡命、一九四六年から一九四九年までニュルンベルク裁判の通訳) は英語が達者で、ニュルンベルグ裁判において同時通訳をやっていました。わたしは妻と、彼女の父親探しをしてみようと決心しました。わたしは妻に英語を教えるために、叔父の紹介でイギリスのある英語教師 (ニュルンベルグ裁判当時の叔父の同僚) を紹介してもらいました。そこで英語を勉強している時、事情を聞いたその教師は、それらしき日本人をハワイで知ることがわかりました (東京裁判の通訳関係筋から)。我々がハワイで彼を訪ねたとき、彼はハワイの大学で日本語を教えており、韓国人の女性と結婚していました。一人の娘さんがいました」。啞然として、彼の目を見つめたまま沈黙する筆者。「事情があって彼女とは別れました。しかし彼女のお母さんは今もまだブレーメンで生きています。わたしの義理のお母さんですから、常時コンタクトをとっています。今九〇才近いです。まだ元気でですよ。」

血を問題にする父権制の犠牲者としての女性、子ども。

戦争という父権制の象徴的存在の犠牲者としての女性、子ども。父権制がつくりあげた啓蒙の最たる産物であるイデオロギーに振り回された女性、子ども。彼女たちとの存在は歴史から完全に抹消されている。彼女たちと同じ体験してきた一人のユダヤ系ドイツ人から初めて証される事実。「関東大震災、第二次世界大戦、冷戦、ベルリンの壁崩壊を体験してきた日本人の彼女に会いたい」と筆者の愚問。「日本人に会うわけがない」と簡単明瞭な彼の答え。

カッセルにあるドイツ語学校 (Europa-Kolleg) のロシア語が達者なドイツ人教師は、「旧東欧諸国においては、ヒットラー時代には、左翼の人間が抹殺された。一つト時代には、自由主義を唱える人間が抹殺された。一つの戦争を挟んで、インテリといわれる全ての人々がいなくなってしまう。旧東ドイツにおいてしかり、ポーランドにおいてしかりである」と嘆いていた。

先の大戦を幼児期に過ごし、戦後東ドイツで、ファシズムの悪夢を払拭せんと、社会主義体制に夢を抱き (当時一六歳)、その後その社会主義体制の崩壊とともに、一九八九年西側世界への統一 (ベルリンの壁崩壊) を体験した一人の女性作家がいる。クリスタ・ヴォルフ (一九二九年生まれ) である。

ヒットラー体制崩壊の後、旧東ドイツは旧ソヴィエトの支配の元に置かれた。旧東ドイツにつくられていたヒットラー時代の強制収容所は、反ソヴィエト体制を唱える人々を閉じこめる強制収容所に変わった。ザクセンハウゼン強制収容所跡を訪ねると、旧ソヴィエト政府の強制収容所の跡をみる事ができる。

この旧ソヴィエトの「赤軍」の強制収容所に抑留されていた一人のドイツ人が彼の家族宛の手紙を残していた。妻と二人の子どもを残して彼はそこで死んだ。戦時中はもちろん、戦後においても、「彼の妻は何もない厳しい戦後、二人の子どもを一人で育て、食べるもの、着るものを手に入れ、子どもの就職口を見つけ、住まいや暖房のことも一人で切り抜けねばならなかった」。

このような状況から一人の女性が作家として社会主義体制の中で登場してくる。ファシズム体制崩壊の後、社会主義体制に夢を抱き、その後、またしてもその社会主義体制に裏切られていく作家。

東側における過去克服の裏切りは西側においても同様に起こる。

ベルンハルト・シュリンクは、一九九五年、興味ある小説、『朗読する人』を発表した。

主人公が一五歳の時出会った女性ハンナは既に大人の

女性であった。主人公よりはるかに年上の女性である。主人公が黄疸で、学校の帰り道に倒れた時に助けたのがハンナであった。彼は不思議な雰囲気の中、彼女に惹きつけられ、彼女から離れられなくなる。ある時、彼は彼女を自分の家に招待する。彼女は彼の父親の書斎にある本棚の本を眼にする。

「彼女は、部屋から部屋を歩いて回り、わたしの父親の書斎に来る。わたしはドアにもたれ掛かりながら彼女を観察する。彼女は、あたかも一編のテキストを読むように壁を埋め尽くした本箱の本を次から次へ眼で追う。彼女は、胸の高さに右手の人差し指を構えて本箱の本の背表紙を追いながら書斎を観察し、部屋を出る。」

これをきっかけに、彼は彼女に本の朗読を聞かせることになる。まだこの時点では、彼女が字が読めず、字が書けない（非識字者である）ことは明らかにされていない。主人公が彼女に本を呼んで聞かせることからこの小説のタイトル、『朗読する人』がつけられている。

さてある時ハンナが主人公の前から忽然と姿を消すことになる。ハンナが次に登場するのは、主人公が大学で法学を勉強している時に、たまたま彼のゼミの担当教授がナチの犯罪を裁く裁判の研究をしていたことから、実習体験としてあるナチ犯罪者を裁く裁判の傍聴に行った

時のことである。あろう事か被告席の一つに彼女が座っていた。彼女は一九二二年生まれ。一九四三年「自分の意志で」ナチスの親衛隊に入隊した。「見張り」の仕事をするということで雇われた。アウシュビッツの強制収容所内の女性を収容所の外にある爆弾製造工場で働かせるため、収容所から工場へ連れていき、そして、働けなくなつた女性を又アウシュビッツに送り返す（送り返される女性を待っているのは収容所のガス室送り）仕事。

ある日、アウシュビッツから工場へ移動中、空襲があり、その女性達を近くの教会に避難させたが、そこに爆弾が落ち、教会が炎上した。ハンナ達が訴えられているのは、その時、教会の扉を閉めたままにしておいて多くの女性が焼け死んだことである。

ハンナには、訴えられている理由がわからない。だって、その当時、上からの命令通り自分の仕事を忠実にこなしたのだから。わからないから、その時の行動を裁判官に克明に説明する。自分に不利なことになるなんて彼女には考えられもしなかった。ハンナと一緒に訴えられた他の女性は、訴えられている意味がわかっていたので、何とか言い逃れをする。親衛隊が残した報告書には、その時の事情が克明に記されていた。言い逃れはできないはずであった（扉を開ければ、隊列が崩れ、逃亡も考え

られたから、女性達を教会の中に閉じこめておかざるをえなかったのである）。

しかし、最後に、他の被告達によって、その報告書はハンナが一人で書いたでたらめな報告書であるとされた。

つまり彼女一人が責任を負うことになった。その場においてもハンナは、自分が字が書けず、字が読めないことを知られたくないため、一切の弁明はしなかった。刑務所にいるハンナに、主人公は多くの書物の朗読をテープにとって送り続けた。彼女に再会を約束したその前の日、彼女は首をくくって自らの命を断つた（自分のやった行為の意味がわかったからだろうか？）。

何ともやるせない話である。ここにも一人の歴史の犠牲者、女性が登場している。字が読めない、字が書けないハンナが「報告書」の作成者に「でっち上げられ」、ナチが起こした犯罪の責任をとらされる。ナチに引っ張り回され、そして今、裁判官から犯罪者の烙印を与えられるハンナ。

三、二〇〇〇年、再びカッセルにて

死の思想

今年の夏二年に一度の広島青少年使節団のハノーバー

訪問につきあった。広島・ハノーバーは姉妹都市であり、この両市の間での青少年交流はもう三〇年以上も続いている。この交流体験談は別の機会にゆずるとして、今年はこの交流訪問機会に、不思議な博物館を二カ所訪問した。一つは、ローマの「カプチン会修道士の墓（教会に隣した博物館）」であり、今一つは、ドイツのカッセルの「葬儀文化博物館」であった。ローマの「カプチン会修道士の墓」の博物館には、かつて地中に埋められていた人々の骸骨があたり一面に「飾られている」。それも想像を絶する数であった。本物の人骨さへ身近に見る機会がなかったどころか、見ることさへ許されない環境に育った筆者には一種異様な雰囲気が漂うその中で身を固めるより他にすべがなかった。「何だ、これは!!!」

学校教育現場視察をかねて、上の使節団と別れを告げた後、二週間足らずの間ではあったがカッセルの知り合いの家を訪ねた。ある学校 (Eichendorf Schule) を訪ねたとき、その学校の前にユダヤ人墓地があった。僕が世話になっている下宿先のエルケはそこを散歩しようと言いつ出した。墓地を散歩することはドイツではそんなに珍しいことではないことは知っていた。そのユダヤ人墓地には一八世紀からの墓石が並んでいた。古い墓石は既に倒れ、その上を緑のコケが完全に被っていた。

「ユダヤ人は、墓石が倒れてもそのままにしておくよ。一端、人を墓地に埋めると、後は人の手を加えたり、直したりしてはいけないの。」

辺り一面緑に被われた静かな墓地であった。そこを出ると、道路一つは喜んでカトリック教徒の墓地があった。「おもしろい比較ができるからこども見てみましょう」とエルケ。入った途端、植物公園と見間違えばかりの華やかな墓地。

「みんな競うように自分の墓を花で飾るのよ。」

日本の墓地もユダヤ人の方に近い。ただし、墓石が倒ればそのままにしておくことはないが。死との距離の取り方がユダヤ人の方に近いと言える。

それから数日後、エルケとカッセルの「葬儀文化博物館」を訪れる。ここカッセルでは昨年から、九月の第二土曜日を「博物館の夕べ」として、深夜にいたるまでカッセルにあるありとあらゆる博物館・美術館を無料で開放している。町あげて館の回りでイベントを企画し屋台もいっぱい出ている。博物館祭りといった感じである。この「葬儀文化博物館」も客でこった返していた。しかしその中で見た物は、筆者には心地いい物ではなかった。ここでは、人が死ねばまず何をしてきたか、歴史をさかのぼって資料を提示する。

例えばこうである。人が死ねば、その肉体から魂が離れるまでには最低三日かかる。その間、その肉体は移動してはならない。窓は開ける。カーテンは閉めない。ローソクその他の明かりはともさない。なるべく魂が何の躊躇も、障害もなくその肉体を去る環境を整える。死ぬ最後の瞬間の儀式。最後に神父に対して神の名をいかに唱えるか。筆者には、死に方をつぶさに教えてもらった経験が全くない。最後の瞬間になんといえればいいのか。人の死に対して何をどうすればいいのか。

別の部屋に行くと、床一面に幼子の骨壺が順序よく並べられていた。生まれて数カ月でコレラその他の病気で死亡。ある子は、死んで生まれている。先の墓地見学でもショックなのに、同じものが、この博物館の中で展示されているのである。いくつかの部屋を通り抜けてやると屋上のベランダにたどり着いた。そこからは、フルダの川がなだらかに流れているカッセルの遥か遠くまで見渡せるすばらしい眺望が開けていた。並べられたテーブルでは館を訪れた人々がソーセージをかじりながらビールを飲み歓談している。筆者にとっての非日常の体験が彼らドイツ人には日常なのだ。

上の体験を通じて実感したのは、我々日本人はどれだけ死というものから遠ざけられているかということだ。

いろいろの葬儀に参加することはある。そこで体験するのは、せいぜい、死んだ人进行うだけである。あらゆる大げさな飾りや言葉で死そのものへの直接的接触を拒まれている。死はあくまで非日常の存在なのである。

先の博物館のある一室に、一人のおじいさんの最後の数日の写真が飾られていた。髭を剃り、歯を磨き、散歩し、ベットに横になり読書している写真。その横にベットで永遠の眠りに入ったおじいちゃんの写真。正に日常の流れの中に死を位置づけている。だからこそ、魂がきれいに抜けた後の人骨に対して何の違和感もなく接することができる。それを博物館に飾り付けることもできるのだ。

今年七月、超高速ジェット機コンコルドが墜落した。乗客の大半がドイツ人であった。八月にケルンの大聖堂で合同慰霊祭が開かれた。遺族の悲しみを前にして神父の語りは次のように始まる。

「彼らは死んだ。もういない。神が彼らを召された。あなた達の中に、なぜわたしの父を、わたしの母を、娘を、息子を、と嘆く人がいるだろう。しかし彼らの死をどのようにして拒絶してはならない。彼らの死をあなた達の胸にしっかりと受け止めよう。だって神がそう選んだのだから。」

二年前に、ハノーバー近くでドイツ版新幹線が脱線し、一〇〇名以上が死亡した事故があった。その時にも事故現場にいち早く駆けつけるのは彼ら宗教関係者である。その現場に駆けつけた被害者の親族が死を遠ざけ、パニックに陥ることを防ぐためである。

今日本では、一六才、一七才の少年犯罪を盛んに問題にしている。行き着くところ教育の在り方が問われることになる。ある人は、昔の寺小屋制度を思い出し、お寺に子どもを集めて勉強会をし出した人もいる。しかし、お寺で学校がやる勉強の続きをして何になるのだろう。お寺がやる仕事は別にあるだろう、と思う。例えば神戸大震災の折り、現場に駆けつけ肉親を失った人々にその死をしっかりと受けとめるように説得しに行ったお寺関係者が何人いただろう。お寺に子どもを集めるなら、その時にこそ、非日常の死を日常たらしめる絶好の機会ではないのか。

そもそも「知」の歴史とは、非日常化されていた存在を日常化たらしめるあくなき挑戦ではなかったのか。

ある一六才の犯罪者が、「人が死ぬのを体験したかった」と語っている。これは、彼の方がタブーに挑戦したのである。彼の行為を「恐るべき犯罪」として非日常化するのではなく、彼の方こそ、非日常化されてきた存在

を日常化しようともがいていると考えることも必要ではないのか。

NPD（ドイツ国家民主党・極右政党）禁止法案提出か!? ドイツの国際化について

三人の極右の若者が、今年の六月一日、デッサウという町でモザンビーク出身の三九才の男の人を殺した。「彼らは彼を殴り、何分間も彼を踏みつけ、その中の一人はロングシューズで踏みつけ、そして叫んだ。ネガールの豚野郎！ さっさとドイツから消えてなくなれ！」（Sueddeutsche Zeitung 31. Aug. 2000）。この殺人事件は、オーストリアの極右の政権参加時期とも重なって、近隣諸国の注目をあびた。

一九九〇年以来、極右の暴力によって二八人の死者がでている。今年に入って既に三人の犠牲者がでている。極右の勢力は九〇〇〇人といわれている。その大半が旧東ドイツ出身者である。カッセルのあるギムナジウム（Friedrich Gymnasium）の教師はこんな話を僕にしてくれた。

「ある旧東ドイツの小さな町で、スキンヘッズの若者が外国人労働者の家に火をつけた。それを回りで見ていた

ドイツ人の大人は拍手していた。」

こういったスキンヘッズの若者を吸収する親組織がNPD（ドイツ国家民主党）である。そのために、今この党の禁止法案が国会に提出されんとしている。そのためにはこの禁止が法的に有効かどうか法的機関によって審査されなければならない。もしその方向で法案が出され、法的機関の審査によって無効とされれば、かえって逆効果にもなりえる。議論の最中である。

先のモザンビーク人殺人事件に対して、上級州裁判所は、八月三〇日、丁度事件があつて二カ月半後、判決を下した。成人に達していた一人に無期懲役、一六才の二人に青年法を適用し九年の懲役刑が言い渡された。異例のはやさである。

ある日、カッセルにあるアイヒェンドルフ学校（中学生のクラス）の生徒を前に、広島について話をする機会を得た。クラスの人数は二〇人。その中の半数以上はドイツ以外の国の国籍を持っていた。ロシア人、アフガニスタン人、コソボ人、インド人、トルコ人、ポーランド人、様々であった。この生徒と同じ年齢のドイツ人の若者が外国人排斥運動を展開するのである。

筆者の下宿先に一週間に一度掃除婦が来ていた。彼女はロシア人であった。本来の仕事は技術関係の会社の通

訳である。それだけでは生計が成りたないもので、こっそり（税金のがれのために）こんな仕事をしていた。仕事場、学校、家庭の中に外国人が入り込んでいる。そんな中でドイツ人の若者の外国人排斥運動である。みんながヒリヒリするのわかる。旧東ドイツの失業率は今でも西側に比べて二倍以上である。一方で旧東欧からの人々の受け入れは減ることがない。彼らの生活保護は勿論である。

外国人排斥運動の対局に国際化の動きがある。このドイツの国際化は、アメリカかヨーロッパに行つて外国語を話そうといった、国際化とは何も関係がないようなものを指していないことはいうまでもない。学校の授業風景を想像してみればいい。一つのクラスにドイツ人とポーランド系ユダヤ人が同席している。そこで先の大戦についての歴史の授業が行われるのだ。一つのクラスに旧西ドイツの子と旧東ドイツの子が同席している。ここで戦後の民主主義についての教育が行われるのだ。筆者が広島について話す機会をもらった学校のクラスで次のような質問を受けた。それは日本の漢字についてである。「わたしはトルコ人です。何で日本にはそんなに難しい漢字を残しているの。アルファベットにすればいいの。何しているの！ 我々のトルコではとっくの昔にそ

うしたのに」

この意見に対して、筆者が答える前に、他の生徒が一齐に反論した。激しい議論の末、先のトルコ人の女生徒が、「わたし休暇にはトルコに帰るけど、おばあちゃんとは話ができないの。おばあちゃんの書く昔の文字は読めないの。残念よね！」と自分に言い聞かせていたのが印象的であった。この彼女が置かれた状況、そしてそんな彼女を取り囲むドイツの状況が正にドイツにおける国際化なのである。

